

千代次の驚き

豊島与志雄

青空文庫

お父さん、御免なさい。あたし、死ぬつもりなんかちつともありませんでした。ただ、びつくりしたんです。ほんとに、心の底まで、びつくりしました。

村尾さんが、まさか……。今になっても、まだ、腑におちません。随分前からのお馴染で、^{きだて}氣質もよく分つてゐるつもりでしたのに……。少し変だと思つたのは、つい近頃のこと
で、それも、実は、あたしの方が変だったのかも知れません。お前さんこの頃どうかして
るね、とねえさんに云われたことがありました。あたしただ笑つてたけれど、自分でも、
どうかしてるような気がしていました。でも、お父さんの教えは、ちつとも忘れたことは
ありません。芸者をしてゐる以上は、男に惚れてはいけない、たとえ旦那にも、岡惚と名の
つく人にも、惚れてはいけない、とそうお父さんは、くれぐれも仰言つたでしょう。おか
しなお父さんだと、はじめは思いましたが、だんだんたつうちに、眞実のことを云つて下
さつたんだと、分つてきました。こう云つちやなんだけれど、お父さん、むかしは随分道
楽なすつたんでしょう。だから、お父さんの仰言ふことは、通り一遍の理屈じゃなく、も
とでのかかった、すつかり入れあげた、底まで見とおした、眞実のことだと、あたしほん
とうに感心しました。男という男は、みんな、うわべはいろいろだけれど、心底は同じも

のだと、あたしにも分つてきました。だからあたし、どんな人も、ほんとに好きにはならないと、そう決心していました。村尾さんだつて、そうです。決して好きになつたわけじゃありません。ただ少し、気懸りにはなつていましたが……。

それも、近い頃のことです。あの方のお母さんが亡くなられて、百ヶ日もたつてからだつたでしょう、急に、しげしげいらつしやるようになり、しまいには、いつづけなさるところさえありました。

「僕はどうせ、病気で死にかかつて、危く拾いものをした命だし、母親も見送つて、気にかかる者もないし、これからの生涯をどんなにぞんざいに使おうとかまわない。実にさつぱりした気持だ。」

そうかと思うと、また――

「ねえ、千代ちゃん、もしもの時には一緒に死んでくれないか。君と一緒になら、僕はいつでも死ぬ用意をしてるよ。」

そんなのが、酒の上での他愛のない調子で、にこにこ笑つていらつしやるんだから、ちつとも張合がありませんでした。けれど、その裏に、何だか気になるものがありました。何だろうか、あたしさんさん考えたあげく、お金のことらしいと思いました。以前は、

お金がほしいとか、僕はとても貧乏だとか、そんなことをしきりに云っていらしたのが、ぷつぷつりと、お金のことは口になさらないんです。それとなくさぐりをいれてみると、中江さんから少し用だてて貰ったとか、母の貯金が残っていたとか、ぼんやりした話でしたが、あたしには、まだそのほかに何かあるような気がしました。それに、何かにつけて、あたしと依田さんとの仲をしきりに気にしていられるようでした。依田さんとはあたし、初めから何でもなかったし、その頃はもうあまりお目にもかかっていたから、笑つてすましましたが、その依田さんと云うのが、実は、村尾さんの勤めていらるる会社の社長なんです。そうしたわけで、これは何か、会社の金に関係がありはすまいかと、そんな想像をして、心配になつてきました。いくらこちらは商売でも、もしもあたしのためになんかんでもあつたら、ほんとにお気の毒です。けれど、その頃村尾さんは至つて鷹揚で、お出先の勘定もちゃんとなすつてるし、何かといつてはあたしにお小遣も下さるし、お盆の時なんか、まとまつて助けてもらいました。

「こんなことを、僕からしていいかどうか分らないが、もしお差支えがあつたら止めるし、そうでなかったら、してあげよう。」

言葉は冗談の調子ですが、お客としての云い草じゃないし、眼色がへんに真剣なんです。

それをふと真にうけて、あたしは考えこんでしまいました。

「では、願いますわ。」

云うといつしよに、眼の中が熱くなつて、涙がいつぱい出てきました。場合がいけなかつたんでしよう。前の晩に二人とも酔いつぶれて、朝遅く眼をさまして、夢のような気持でぼんやり顔を見合つてた時でした。村尾さんはあたしの涙を見ると、いきなりあたしの手をとつて、お嬢さんか奥さんにでもするように、しおらしくうなだれて仰言るんです。

僕は君といつしよになろうとか、君をすっかり自分のものにしようとか、そんなつもりでいるんじゃない。ただ、君にすっかり生きていてもらいたい。君はほんとの労働者だ。けれど、労働者としての矜りを持っていない。今の世に労働者はいちばん尊いものだから、それだけの矜りを持たなければいけない。その矜りを持つには、売らないことだ。働くのはいくら働いてもいい。けれど、売つてはいけない。働くことと売ることとはちがう。とそのようなことを、まじめに真剣に仰言るんでしよう。ふだんは無口なただけけれど、そんな時にはひどくお饒舌になるのです。思いきつて働くがいい、けれど売っちゃいけない。それだけが、君に対する僕の望みだ。とそうくり返し仰言るんです。それがへんに、あたしの胸を刺しました。あたしいつのまにか泣きだして、村尾さんの腕にきつく抱かれてい

ました。息苦しくなつて、自分に返ると、何だか極りわるい気がしました。そんな気持ちになつたことは、近頃ないことです。

そのようなことがあつたり、また何よりも、いちばん度々逢つたものですから、あたしいつか しばらく、村尾さんを頼りにするようになっていきました。といつても、心から好きになつたのとはちがいます。お父さんの教えは、りっぱに守つてゐるつもりでした。芸者をしている間は、どんな人でも、ほんとに好になつてはいけない、とそう決心してました。そして、やはり、いくらか我儘の出来る地位にはなつていきましたけれど、前からの義理あい、時には身体で稼ぐことも続けていました。それも、あたしにとつては、働くことの一つでした。村尾さんとのそうしたことも、働くことの一つでした。ただ、働くのはよいが売つてはいけない、というその区別が、何だか胸を刺すようでいて、それもはつきり分りませんでした。それに、村尾さんばかり頼りにしていたのでは、お金の上的こと、村尾さんが今にきつとお困りになる、只今でもどんな無理をなすつてゐるか分らないと、そうした心配もあつて、村尾さんばかりを大事にするわけにもいきませんでした。

それでもやはり、あたしの心ではなく、あたし全体が、村尾さんの方へよりかかつていつてゐるようでした。殊に、誰からかつけねらわれてゐることに気がついてからは、なおそう

でした。つけねらわれるといつても、ぼんやりしたこと、何にもはつきりしたものはつきとめられませんでした。初めは、夜遅くお座敷からの帰りなどに、その辺の電信柱の影や、看板の向うや、町の曲り角に、誰かがつつ立つて、あたしの方をじつと見てるようなけはいだけでした。いつそんなことが気になりだしたか、自分でもよくは覚えてはいませんし、またあたしは、近眼に乱視なので、遠くがよくみえませんが、たしかに、物影からあたしの方をじつと見てる人があるんです。おやと思つて立止ると、もうその人の姿はありません。それにあたしは、そんな時はたいてい酔つてたものですから、何かの気のせいだろうぐらいに思っていました。

それが、だんだんはつきりしてきましたし、しつっこくなってきました。家の近くを、夜遅く、変な人がうろついていた……家の横手で、変な人が立聞きしていた……そういう噂を、ちよいちよい聞くようになりました。また、夜中の一時二時頃、誰からともなく、あたしに電話がかかってきました。千代次さんはいますかと、きまつてそうなんです。いない時には、そうですかとだけで、切れてしまいますし、いる時にも、そうですかとだけで、切れてしまいます。どうも、お出先からの電話じゃありません。それが、女の声だったり、男の声だったりします。電話に出るのは、たいてい仕込さんですが、あとでは、あ

たしが待ちうけていて出てみましたが、そうですかとだけで切れてしまうので、ばからしくなりました。

そうしたことから、だんだん、あたしをつけねらつてゐる者があるということが、分つてきました。うちのねえさんは心配して、心当りがあるかどうか、あたしにたずねましたが、全く覚えのないことでした。あたしこれまでに随分、いろんな男の人を知ってはいませんが、どれもただ、稼ぎのためだけで、お父さんの教えの通り、心移したことはありませんし、したがって、だましたとか、不実なまねをしたとか、とにかく、怨まれるような筋合のものは、一つもありませんでした。それがあたしの自慢だといつてもよいくらいでした。つけねらわれる人があろうなどは、てんで心当りがありません。それなら何か不良のせいですよ、と箱やさんは云いました。こんどわたしがとつかまえて、袋叩きにしてやります……。そして箱やさんはあたしの出入りに気をくばってくれました。

そうして、ねえさんから心配されたり、箱やさんから気をくばられたりすると、かえつてあたしは心細くなつてきました。そうしたことから、しぜんと、村尾さんを頼りにするようになつて、五六日お顔を見ないと、手紙をだしたり、また、逢えば逢えたで、引留めなくなつたりするのです。村尾さんはいつも受身の方で、酔っぱらつた時のほかは、自

分から泊つてゆこうと云い出すようなことは、ほとんどありませんでしたから、いつもあ
たしの方がだだをこねることになって、時には無理なこともあったでしょうが、迷惑そう
な顔をしながらも、実は嬉しがつていらつしやるのが、あたしにはよく分つていました。

そしてあたしたちの間は、急に深くなつていきました。ところが、ふしぎなことに、あた
しは誰かにつけねらわれることを、村尾さんに話しにくかつたんです。つけねらわれて
るといつても、前のように云えば、毎晩のように聞えますが、実は五日に一度とか、七日
に一度とかで、そう始終のことじゃありませんし、村尾さんと逢つてると、そんなことを
気にするのが、ばからしくも思えるのでした。がそればかりでなく、もつと何か、話しに
くいものがありました。お話してどう思われようと、あたしの方はかまいませんが、それ
が村尾さんの気持にどうひびくか、氣遣われてなりませんでした。

それというのも、その頃、村尾さんの様子が少し変だつたせいもあります。何だかこう
冷たいよそよそしい態度をなすつて、早く依田さんの世話になつたらどうかとか、よい且
那を見つけたらどうかとか、僕がこれほど力を入れてやつてるのにまだ売る気なのかなど
と、それもただのやきもちとちがつて、へんに冷く突き刺すように仰言るんです。あたし
いい加減にあしらつて、旦那なんか面倒くさくていやだの——それもあたしとしては本当

のことだし、また、インチキな稼ぎ方なんかちつともしないと——それもあたしの気持からすれば本当のことだし、そんな風に答えますと、こんどは村尾さん、あたしの顔を見て、ここにこ笑っていらつしやるんでしよう。それも、ひとをばかにしたような、そのくせ可愛いいといったような、そういう笑いかたなんです。そんなのが実はあたしの性に合うので、いい気になると、ふいに、考えこんでおしまいなさる。かと思うと、これからどこかへ飲みにいこう、大いに愉快にやろうと、そうなんです。そして酔っぱらうと、いやにつつかかかってきたり、また、何でもないので、何も云わないのに、じつと眼を据えて、涙をこぼしていらつしやる。わけをたずねると、いやに不機嫌で、怒っていらつしやるよ。うなんです。

落付かない、いらいらした、今にも破裂しそうなものが、あたしにも伝わってきて、じりじりと、あぶない瀬戸際におしつめられてるような気持でした。そんなこと、あたしには初めてなんです。ほかの人はどうかしらと思つて、見廻してみると、一流のちゃんとしたねえさんで、旦那のほかに二三人の岡惚をもつてのがあったり、お酌あがりの娘さんで、ちよいちよい浮気をしているのがあったり、自由な身でもないのに、一人のひとを守つてるのがあったり、さまざまでいて、そしてみんな、朗かに落付いてるようでした。こん

なに困つて苦しんでるのは、あたし一人なのかしら。そう思つて、ふとしたきつかけから、静葉さんにたずねてみました。以前はさうとう莫連をした人で、今では、島村さんという旦那とも岡惚ともつかない一人のひとを守つて、すっかり堅くなつて、そのために苦勞をしながらも、それがとても大つぴらで朗かで、ちよつと變つてるのでした。実はあたし、困つちやつたの……とさういう風にきりだしましたが、自分でもはつきりしないので、先がつかえて、みんな平気で浮氣をしたりなんかして、あれでいいのかしらと、そんなことを云うと、静葉さん、それが当り前じゃないのと、一言で片付けてしまいました。そんななら、静葉ねえさんと島村さんとは……と云いだすと、静葉さんは急に、とてもこわい眼付をしました。

「何を云うのさ。あんたなんかに分つてたまるもんですか。」

ほんとに怒つてるんです。ひやかされたとても思つたんでしょう。あたし云い訳をしようとしたけれど、とつつきがありませんでした。その何でもないこと、静葉さんから怒られたということが、どうしたわけか、ひどくあたしの氣持をうち挫いてしまいました。あとであたしは一人で、涙がでてきて仕方ありませんでした。もと芳町のりっぱな芸者で、箱やさんといっしょになつて、長年苦勞したあげく、爺さん婆さんになつて、二人で仲よ

く乞食をしてあるいてるのだという、その人たちに出逢つて、あたし、五十錢銀貨をあげました。

そしてるところへ、或る朝、夜廻りの作さんが、あたしをそつと呼びだしました。昨晩おそく、この辺をうろついてた男がいた。前の通りや横町を、ゆっくりと往つたり来たりしていて、それが、あたしの家の前にさしかかると、立止るともなくちよつと足をゆるめて、家のなかの様子に注意をむけてる風だった。作さんは、その男とすれちがってから、あとで何だか気になり、暫くして戻つてきてみると、やつぱりそうなので、ふと耳にはさんだあたしの話を思いだし、こいつかなと思つたのでした。黒いマントをすつぽりときて、黒い帽子をふかくかぶつて、それほど寒くもないのに、襟巻で頬をつつんでるんだそうです。この野郎と、つかまえるつもりで、作さんが向つていくと、先方では早くも気がついて、つと横町へ切れこんだかと思うまに、歩いてるのか駆けだしてるのか、足音もさせないで、それが風のような早さで、消えてなくなつてしまつたのでした。だけど、あわてたとみえて、ハンカチを落していった。もし心当りの人でもあるといけないから、ないしよで知らせるんだといって、作さんは、使いふるした皺くちやなハンカチを差出しました。ふつうの安物のハンカチで、そんなものに見覚えのあるう筈はなく、またこのひょうきん剽ひょうきん軽な

年よりの作さんが、何を云うことやら、あたしはよくも尋ねないで、ただお礼をいって、当分ないしょにしようという頂戴とたのんで、少しばかり心附をやりました。

それが、朝のうちは何でもなかつたが、おひるからさむぎむと空が曇って、夕方になると、へんに気になりだし、泣きたいような心持になって、ついふらふらと、村尾さんに速達の葉書をだしてしまいました。そして安心してると、九時頃、喜久本からかかってきました。村尾さんです。

あたし、とても淋しいような、また浮々とした気持で、急いでいきますと、村尾さんはどこで飲んできたのか、もうだいぶ酔ってるじゃありませんか。それでいて、きちんと坐って、片手で火鉢のふちをさすりながら、何の話かって、いきなりそうなんです。ただ、お逢いしたかったの、と笑ってみせましたが、あたしもぐいぐい飲んでやりました。何のために速達なんかで呼び出したのか、自分でも分らなかつた上に、村尾さんの痩せた蒼白い頬が、きつく引緊って、冷い眼があたしを見据えてるんです。すり寄って、甘ったれてやりましたけれど、村尾さんは姿勢をくずしません。あたしの指先をいじりながら、君ともう別れなければならぬかも知れないけれど、しっかりしておくれ、それが僕の頼みだと、いやにまじめなんです。それがどうも調子つばずれなので、あたし

は微笑んで、やたらにいやいやをしてみると、ふいに、村尾さんの眼から、涙が流れだしました。ふだんのまんまの顔付で、涙がはらはらと出てくるんです。それをあたし、またかと思つて、ハンカチで拭いてやりましたが、村尾さんは初めて自分の涙に気がついたように、身を引いて、袂をさぐっています。ハンカチがありません。あたしのハンカチをとつて、眼をふいて、もう笑っていました。あたしは、その時はつとしました。作さんが拾つたというハンカチのことを思い出したんです。そのつまらないきつかけから、いやにまじめなものが頭のおくに眼をさましてきて、何やかやくわしく知りたくまりました。家のこと、女中さんのこと、会社のこと、お友達のこと、そして何よりもお金のこと……。だれどもう村尾さんは、何にも興味がなさそうに、あたしの云うことなんか耳にもとめずに、小唄をくちずさんだりして、投げやりな浮いた眼付をしているんです。僕もこれで、無理なこともしてきたし、さんざん苦勞もしたし、一人前の男になったものだど、ひとごとのように云うんです。あたし何だかなさけなくなつて、やたらに酒をのんでやりました。

そうしたところへ、電話でした。もう十一時半頃でしたでしょうか。日頃ひいきになつてゐたのお座敷だったので、何の気もなく受けて、戻つてくると、村尾さんはしらけた顔で、笑いながら神経質に、お座敷だろうから帰るよと、すぐに立上ろうとなさるんです。

あたしはなおなさけなくなつて、ほんとに涙ぐんで、さんざんだだをこねてやりました。今晚はどうしたつて帰さない、ちよつとで貰えるお座敷だから、待つていて下さらなけりや承知しない、たつて帰ると仰言るなら、断つてしまつて側についてる、とそんなことを云つてるうちに、村尾さんの、ぞつとするほど冷たい眼にぶつかりました。あたしにはよく分つています。断るなら初めから断つたらいいと、そういう意味でしょうが、あたしにしてみれば、夜遅く、中貰いに一寸でもというお座敷へは、顔を出しておかないと、肩身がせまいというわけもあつて……そんなことを考えていると、もう芸者も嫌だし、世の中も嫌だと、投げやりな氣持になつて、村尾さんをむりに引止める力もなくなりました。そして酔つたふりをして、半分はほんとに酔つて、つぶしながら、村尾さんのあぶなっかしい足音をぼんやり聞きなりました。

それでも、きつとまた戻つていらつしやるにちがいない、と心待ちにして、立上りもしないでいると、おのぶさんがやつて来て、けんかでもしたの、と心配そうにきくんです。あたしうるさくなつたから、村尾さんはまた戻つていらつしやる筈だから、きつと引止めて、すぐに電話を下さい、とそう頼んで、ほかへ廻りました。賑かな、ばか騒ぎがすきなかたです。お酌さんを交えて三四人で、騒いでいましたが、やっぱり心が沈みがちで、村

尾さんのことが気になって仕方がありませんでした。いくら飲んでも、頭のしんからさめていきます。一時すぎになって、喜久本に電話してみると、村尾さんはいらっしゃらないとのこと。なお気になって、そのままもらつて、外に出ましたが、足もとがふらついているのに、頭のしんがさえて、震えあがるような寒けがしました。そしてどこへ行つていいかわからないような気持になって、いつのまにか泣きだして、家の近くをぼんやり歩いていました。そうしたことにふと気がついて、ばかばかと自分に云いながら、よその家の戸口によりかかつて、溜息をついて、なんて自分はばかなんだろう、こんなでどうなるんだろうと、心の中でくり返していますと……向うから、せのひよろりとした男が、黒いマントを引きずるように着て、黒い帽子をかぶつて、黒い襟巻で頬をつつんで、薄暗い通りに眼をじつと据えて……どうも、村尾さんらしいんです。あたし、いちどに息をつめ、近眼の眼をみはり、じつと待ち受けて、側まで来ると、つかつかと出て行ってやりましたが、村尾さんと眼を見合つたとたんに、気が遠くなりました。何か声が出て、それからしいんとなつて、どれくらい時間がたつたか……やがて、がやがやした人声がついたので、眼をあいてみると、あたしはそこに一人しやがみこんでいて、向うから、芸者衆が四五人、お客さんをとりまいて、だらしなく酔っぱらつてやってきました。あたしはむちゆうで馳けだ

して、家の戸を引きあけて、とびこんでいきました。

まだ起きて待つてた松若さんが、すつとんきような声を立てました。あたしの様子がよっぽどへんだつたにちがいありません。だけどあたしはもう、そんなことにとんちやくなく、二階の室にかけあがつて、ふとんの上にきちんと坐つて、物に憑かれたような気持で、じつとしていました。お座敷のままふとんのまんなかに坐つてゐるあたしが、こわかつたのでしよう、松若さんがそつとのぞきに来て、またおりていったのを、ぼんやり覚えていきます。

それから暫くして、あたしはとびあがつて、窓を引開けました。たしかに、村尾さんが外に来ています……。村尾さん、みんなあの人だつたんです。お座敷では、すっかりした冷淡なほどの素振をしながら、一人で、あたしの家の前をうろついていたんです。全く別々なその二人が、じつは一人だつたんです。まだ、誰に遠慮もなく逢えるのに、どうしてそう二人になるんでしょう。嫉妬……真心……恋……ばかりでもない。あたしが何もかもうつちやつて進んでいかなかつたのが悪かつたのかしら。そんなわけはない。そんなら、なぜ向うからもそうして下さらなかつたのかしら。あたしが芸者なんかしてるのがいけないのかしら。それでも、あたしだつて……。窓からすかしてみると、表の通りは、しいん

と薄暗くて、向うになんだか、村尾さんが……。やっぱりそうなんだ。あたし心の底から、びっくりしてしまって、のりだしてよく見ようとすると、とたんに、窓枠の木が外れて、身体が宙にとんでしまいました。強い声で叫んだと思います。頭がめっちゃな大きなものにゆすぶられて、まっくらになりました……。

二階から落ちて、玄関の植込の影の捨石に頭をぶっつけた千代次は、昏倒したまま病院にかつぎこまれたが、脳の内出血で、手当の仕様もなく死んでいった。

その三十五日忌の品物が、村尾庄司の家に贈り届けられた時、村尾は包みを開こうともせず、庭にとびだして、冬の冷い朝日のなかで、大きく深呼吸をした。骨だった彼の眉間には、深い決心の色が現われていたが、それがどんな種類のものだか、今は知る由もない。それに第一、人の決心などというものは、実践に移されない限り無意味なものだから、ここで吟味することをやめよう。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第三卷（小説3 [# 「3」はローマ数字、1-13-23] ）」未来社

1966（昭和41）年8月10日第1刷発行

初出：「文学界」

1934（昭和9）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2008年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

千代次の驚き

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>